

美術家、富山妙子の軌跡と展開 ——1990年代以降を中心に——

小林 宏道

私とアーティスト富山妙子との出会いとその後の協働してきたことが、偶然だったのか必然であったのかは、もはやその道のりも四半世紀を越えた今となっては何とも判別し難い感がある。

本稿では、私が主に関わってきた1990年代以降の富山妙子の美術家としての活動の軌跡とその背景や時代性について、具体的な事例をたどりつつ、その日本と世界における富山妙子の美術家としての特性について振り返り、考察する。

私が富山妙子と直接的に展覧会に取り組むようになったのは1995年に多摩美術大学附属美術館（現多摩美術大学美術館）で開催した「戦争50周年 富山妙子・20世紀へのレクイエム」展ということになっている。この展覧会の企画・開催の経緯については、富山の支援者で多摩美術大学の卒業生であった深澤純子より、申し入れがあったのだが、その際に上司の学芸員から、開催の是非を相談されたのに対して、二つ返事で賛同をした。というのも私自身は、富山妙子という作家について既に周知していたからである。

私が前職の多摩市複合文化施設パルテノン多摩の学芸員をしていた1992年に、市民団体が主催して行う多摩市フェミニストフェスティバルにおいて、「エロース・わが痛み—富山妙子展」が開催されることになり、市の企画部長の渡辺幸子（後に市長）の肝いりの案件であることから上司に学芸員としての協力を指示された。そのときはすぐ後に、日本で初めて公共の文化施設として「ケーテ・コルヴィッツ展」の企画・準備をしており、宮城県美術館、伊丹市立美術館、神奈川県立近代美術館への巡回展の一番館として奔

走っていた。しかし、富山妙子というドイツのコレヴィッツに引けを取らない社会性の強い作家の展覧会はプレビューとして絶好とばかりに全面的に協力した。そのときに初めて面会して、実際の展示や作品の意図や扱いについて学芸員として関わったのだが、富山妙子を知り、作品を見るのは初めてではなかった。まだ美大生であった1985年に、同級生が出品参加していた上野の東京都美術館で開催されていた第11回从展での「特別陳列 富山妙子」（第1回中村正義賞受賞記念）を拝見し、講堂で行われた映画『はじけ！ 鳳仙花』の上映と土本典昭監督と針生一郎のトークにも参加していたのである。もっと言えば、1981年に高校の修学旅行とはいえ、光州事件直後の戒厳令下の韓国を訪れた経験からも、日韓問題を扱う富山妙子に興味を持ってぬ理由はなかった。

そのときは公立施設にありがちな、展示手法や施設管理の問題で、担当者と衝突することもあり、憤慨し、意固地になっていた富山妙子に、何とかするので大丈夫です、と必死に仲立ちして実施に取りついたりもした。その後、私は引き続き「ケーテ・コレヴィッツ展」を成功させたものの翌年に離職していた。しかし、国際交流基金アセアン文化センターでの「アジアへの視座―帰らぬ少女原画展」には足を運んで、富山妙子と再会していた。その翌年1994年に多摩美術大学附属美術館の学芸員となっていた私にとっては、富山妙子の展覧会を実施することに何のためらいもなかった。

大学美術館という独立自治を旨とした機関として、多くの実行委員や支援者の方たちの協力のもと、阪神・淡路大震災やオウム真理教による地下鉄サリン事件などもあったが、1995年の春に無事開催に漕ぎ着けたし、知人のフランス人NHKディレクターが番組制作もしてくれた。カタログの代わりに『Silenced by History Tomiyama Taeko's Work』（現代企画室）が出版され、会期中、富山の盟友でジャーナリストの松井やより、韓国の尹凡牟（現国立現代美術館館長）らのシンポジウム（図1）、全スライド作品や映画『はじけ！ 鳳仙花』『自由光州』の上映、高橋悠治による音楽ワークショップ、韓国舞踊プンムルで学内を練り歩くなど、かつて無い大規模な展覧会となった。展示も回顧展的な過去の作品と新作のハルビンシリーズ、実験的な731部隊をモチーフとしたインスタレーションなど多彩なものとなった。また、その展示会場では、映画監督の原一男と疾走プロ、そして学生ボランティアによる公開撮影が敢行され、新たなスライド作品『ハルビン：20世紀への

『レクイエム』が制作され、後日、大学講堂にてお披露目上映イベントも行った。

この展覧会はその後、尹凡牟の企画でソウルに巡回し、8・15光復記念日に併せて東亜ギャラリーで開催された。それに前後して富山妙子には秋の第1回光州ビエンナーレでの「光州5月精

神展」への招待展示の話がまとまり、巨大な壁面に光州シリーズ作品を散りばめた展示が発表された。

一般の美術館では、一人の作家の展覧会が終了したらそれでお終いで、関わりもあまり持たないというのが通例だが、こちらはそうはならなかった。展覧会の終わりが、むしろその作家や活動との関わり方の再スタートでもあるという意識が館としてあった（ちなみに同じく社会性のあるベン・シャーンについても過去4回にわたって展覧会を開催している）。

翌年の1996年に、富山妙子から川崎と韓国で大きなプロジェクトを計画しているので、相談に乗ってほしいかという連絡がきたときも、館長をはじめ館員一同全面協力体制で臨むことにした。約2年にわたり川崎での数10回に及ぶ実行委員会に足しげく通い、委員のほとんどが市の自治労職員ということもあり、美術展、文化事業の専門家として惜しむことなく尽力した。実施の1998年には、5月の光州に始まり、秋の韓国富川市（図2）、冬の川崎まで、洪成潭との二人展「From the Asians」、ワークショップ、カタログ編集など、美術館の持てるノウハウとマンパワーをフルに発揮した。この企画は「日韓アートの祝祭」として金芝河の初来日とマダン劇や日韓セミナーなどのイベントや話題性とのセットだったので、美術展に特化出来なかった富山妙子は体調を崩したが、1999年をまたいで、2000年の第3回光州ビエンナーレの「芸術と人権展」に招待出品することが決まった。この展示にもコーディネーターの古川美佳と共に展示の準備と設営に全面的に協力



図1 「戦争50年記念 富山妙子・20世紀へのレクイエム」展シンポジウム（1995年 多摩美術大学附属美術館）

した(図3)。(とはいえ自らの多摩美術大学美術館の再オープンの時期と完全に重複していたが……)この展示では洪成潭や丸木俊らのブースの間で、光州シリーズの展示と、前年から富山妙子に協力して制作を続けていた油彩とスライドの「きつね物語」シリーズを発表した。

光州ビエンナーレと並行して、写真家の本橋成一からの申入れで、三軒茶屋にある世田谷区生活文化工房にて絵・写真・詩・音楽のコラボレーションである「きつねと炭鉱展」の準備も進めていた。二人ともデビュー作品が炭鉱をテーマにしていたということから過去の写真とドローイング

や版画のコピーをコラージュして、それに詩人の藤井貞和の言葉、作曲家の一ノ瀬響の音響効果で会場構成をする実験的なインスタレーション展示であり、各種のトークやライブも会期中開催した。この展覧会は翌年、福岡のアクロス福岡に巡回し、筑豊の炭鉱関係者との交流や山本作兵衛の特別展示もあった(図4)。

21世紀となった2001年には、9・11米国の同時多発テロにいち早く反応した富山妙子は、前年に訪れた台湾への取材などを通して構想し、制作に取りかかろうとした『海の道 傀儡子物語』という新シリーズを広く周知して



図2 「From the Asians」展でのインスタレーション (1998年 韓国富川市庁舎ロビー)



図3 「芸術と人権」展壁面インスタレーション (2000年 第3回光州ビエンナーレ国際展)

もらおうと、火種工房25周年記念イベントを催し、富山妙子の新しい門出（船出）を祝ったが、奇しくもその10月6日は多国籍軍によるアフガニスタン侵攻開始日でもあった。また成蹊大学の松下たゑ子教授の呼びかけで学食の温室風な空間をギャラリーのように見立てた展覧会「富山妙子展—Let's Go To Japan—」を開催し、記念イベントには富田アジア・太平洋センター所長や李静和教授、松井やよりも参加してもらった。

翌2002年には、スライドやテキストの英訳で永年協力してきた京都精華大学のレベッカ・ジェニスン教授の企画で「巫女ときつね」展が開催された。

会場のギャラリーフロアの学芸員、小林昌夫と共に光州や海の記憶、帰らぬ少女、ハルビン、きつね物語、新作の蛭子と傀儡子の一部など多彩な作品群やシャーマンを想起させるインスタレーションなどによる立体的な展覧会が実現した。その後、京都精華大学はハルビンの軸装作品6点をコレクションに加えてくれた（図5）。展覧会に間に合わせるように、新作スライド作品『きつね物語 桜と菊の幻影に』の撮影、編集が進められ完成していた。その前年には富山妙子からの要望で、1980年に制作したスライド『倒れた者への祈祷 1980年5月光州』の再制



図4 「きつねと炭鉱展」(2001年 アクロス福岡)



図5 「巫女ときつね」展 (2002年 京都精華大学ギャラリーフロール)

作を依頼され、新規撮影を任された私が、引き続きスライドの撮影を引き受けていくこととなった。

2003年から2004年にかけては、新作シリーズの制作と並行して、盛んに今までの作品を解体、再構成する試みとして、数多くのコラージュ作品を制作し続けた。2004年にはそれらを発表するノースウエスタン大学のローラ・ハインとレベッカ・ジェニソンの尽力によるフィラデルフィアのYMCAおよびテンプル大学、エヴァンストンのノースウエスタン大学でのコラージュ作品展「富山妙子・記憶と和解」が開催され、またドイツのルール大学にて、1980年代のベルリンでの展覧会協力者であったイルゼ・レンツ教授の企画による、コラージュ作品展も実現した。2005年にも国内でのいくつか凱旋的にコラージュ作品展が行われた。また2001年に急逝した盟友の学習院大学教授の千野香織（翌年には松井やよりの逝去も続く）の第3回千野香織記念賞を受賞した。

そうした慌しさや悲しみを越えて、作品の制作とスライド作品の撮影を続けていた2008年の年頭に北川フラムから打診があり、2000年から新潟の越後妻有で開催している「大地の芸術祭」というアトリエンナーレの第4回展（2009年）に、富山妙子パビリオンを作りたいとの申し入れであった。越後妻有南部の清津峡小学校という、たった10年で廃校となった校舎全館を使って「アジアを抱いて—富山妙子の全仕事展 1950~2009」を開催することになり、その展示キュレーションを私が引き受けることとなった。と同時に、岩波書店から自伝『アジアを抱く、画家人生 記憶と夢』と、現代企画室から新作シリーズの画集『蛭子と傀儡子 旅芸人の物語』が出版されることも決まった。またスライド作品『蛭子と傀儡子』も8点の油彩と数10点のコラージュを駆使して撮影、編集し完成させた。展覧会は新潟南部の秘境でアクセスの悪いロケーションであるにもかかわらず、それまでで最大規模の作品数と空間が用意され、多くの来場者と反響を呼んだ（図6）。

この画家人生を総括するような大プロジェクトを終え、いくつかの展覧会への出品やミシガン大学から『Imagination Without Borders』の出版などがその後行われていたが、2011年3月の東日本大震災と福島第一原子力発電所事故が発生すると、富山妙子から早速、震災と原発をテーマとした新シリーズの制作にとりかかりたい、という相談が舞い込んできた。それまでは人生の終焉とまとめのイメージで、ユーラシアの星座（宇宙）をテーマと

して、自らの原風景の満洲から空へ飛び立つような想いを吐いていた。しかし、俄然現実社会への鋭い視線と懐疑を作品に込めようという衝動に突き動かされ、天災と科学文明批判という難しい表現に取り組んで行った。作品は様々な神々や異界的な風景を用いたメタファーでもある、巧みな画面構成とアエロニーに満ちた大作を次々と描き上げていくが、原発や放射能という目に見えず、絵にしにくい制作にも果敢に挑戦した。そうして完成した5点の油彩と10数枚のコラージュは、すぐに作品撮影とスライド作品制作に取りかかり、油彩のポストカードセットも制作した。

2012年には東京大学生産技術研究所での国際シンポジウム「コリアン・ディアスポラの記憶を手繰る—『犠牲の状況』を超えて—」(図7)など、いくつかのシンポジウムや作品展にて新シリーズ『海からの黙示』が限定展示され、2013年には私のキュレーションで調布の東京アートミュージアムにて「富山妙子 現代への黙示—9・11と3・11—」展で本格的に新作シリーズが光州やチリのシリーズと共に発表され、スラウド作品『海からの黙示』もデモ上映された(図8)。

2015年には、ベルリンのnGbKでの韓国、台湾、日本の禁止され抑圧さ



図6 「アジアを抱いて—富山妙子の全仕事展 1950～2009」(2009年 越後妻有アートトリエンナーレ)



図7 「コリアン・ディアスポラの記憶を手繰る—『犠牲の状況』を超えて—」での作品展示(2012年 東京大学生産技術研究所)

れたアートをテーマとした企画展「禁止されたイメージ」展に招待され、富山本人も渡独への意向を強く持っていたが、展示のための新作制作で体調を崩し断念した。展示は私との綿密な計画の上、展示現場を私が監督し、本人のビデオメッセージを上映する機会を得た（図9）。

2016年、原爆の図丸木美術館にて「特別展示 富山妙子 終わりの始まり、始まりの終わり」が開催され、新作の油彩2点を加えた油彩と版画、コラージュにより構成された展示が行われた（図10）。翌2017年にソウルの国立女性史展示館での「真実—平和への約束」展に招待出品したカラー

ジュ作品と版画作品とパネルから選定された、「特別展示 富山妙子 終わりの始まり、始まりの終わりII」を2019年に神奈川県相模原市の藤野倶楽部にてレベッカ・ジェニスンとの共同企画として開催した。

そして2020年には、ソウルの国立現代美術館の尹凡牟館長からの熱烈な要請で、「海の記憶」と「きつね物語」からの油彩作品2点が朝鮮戦争70周年記念展「見知らぬ戦争」で特別展示された。また、2021年3月にはソウルの延世大学博物館にて「記憶の海へ—富山妙子の世界」展が開催される。（新型コロナ禍の余波で2020年9月から延期）

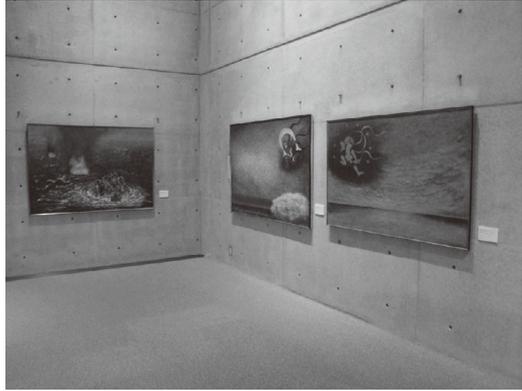


図8 「富山妙子 現代への黙示—9・11と3・11—」展（2013年 東京アートミュージアム）



図9 「禁止されたイメージ」展（2015年 ベルリン nGbK）

これら永きに渡る富山妙子の作家活動に対する作品制作と展覧会制作、作品画像管理等を共にして来たわけだが、富山本人は、1980年代半ばからの心臓疾患や喘息や骨折、難聴等で入退院を繰り返しながらの復帰の度に、新たな作品構想に意欲を燃やし続けて来て、私もそれに呼応するように芸術的アドバイスや各



図10 「特別展示 富山妙子 終わりの始まり、始まりの終わり」の展示と富山妙子（2016年 原郷の図丸木美術館）

種情報提供、諸専門分野の説明等に携わり続けて来た。今後も新型コロナウイルスの感染やパンデミックをテーマとした新作に挑戦したいと語っている。

最初の富山妙子との出会いに戻るが、美大生とはいえ、理系で物理学を目指していた自分が科学文明の未来への懐疑と、美術、美学の現実社会との乖離的傾向の狭間で辟易していたときに、富山妙子の一貫して社会現実と人間性を直視し、芸術による社会参加を謳う活動は、何らかの光明を感じさせるものであった。1998年の日韓プロジェクトを総括する意味で、1999年に行った富山妙子との数回にわたるロング対談（未発表）の中で、市民とアート、パブリックとアートの意味と歴史について深い議論をしたことが、その後の21世紀に入ってからのお互いの活動に大きく反映していると感じている。私が欧米アートに依拠しない、アフリカ美術やアイヌ文化の美術などオルタナティブアートへの取組みや、デジタルやメディアの暴走への危惧に対して富山妙子も大きな関心を寄せた。対談の最後での「何が終わり、何が始まるか」という命題は、一番最近の制作テーマとして具現化したのも奇遇である。

富山妙子のブレない作家姿勢と表現意欲は、私以外にも多くの人たちとのネットワークと友好によって、共鳴し合い作用した軌跡と展開であり、単なる同好者を対象としたローカルアーティストではない、地域と時代を超えた真に地球規模で未来に遺し伝えられるべき魅力にあふれている。

資料

富山妙子年譜

年	事項	世界と日本の出来事
1918		第一次世界大戦終結、スペイン風邪が世界的に数年数次に及び大流行する。
1919		ドイツ、ヴァイマルに総合美術学校国立パウハウス創立される。(～1933, 最期は私立) 朝鮮で三一運動が起こる。中国で五四運動が起こる。
1921	神戸市に生まれる。	
1922		ソビエト連邦が成立する。
1923		関東大震災が発生する。
1924		アンドレ・ブルトンによる『シュルレアリスム宣言』がなされる。
1925		パリ現代産業装飾芸術国際博覧会開催、アールデコが登場する。
1926		昭和天皇が即位する。
1929		ニューヨーク、ウォール街で株価大暴落、世界恐慌へ。
1931		関東軍による南満洲鉄道爆破（柳条湖事件）で満洲事変が勃発する。
1932	少女時代は家族と共に旧満洲、大連とハルビンで過ごす。	日本は「満洲国」建国宣言を強行する。
1933		ドイツでナチスのヒトラーが政権を獲得する。
1936		ベルリンオリンピック開催。スペイン内戦が始まる。(～1939)
1937		盧溝橋事件により日中戦争が始まる。南京大虐殺事件が起こる。 パリ万国博覧会でピカソが『ゲルニカ』を発表する。
1938	ハルビン女学校卒業後、単身帰国し女子美術専門学校（現女子美術大学）に通うが中退する。	
1939	外山卯三郎、福沢一郎、長谷川三郎、田中一松らが主宰する女性向けの「美術工芸学院」へ通う。	ドイツのポーランド侵攻により第二次世界大戦が勃発する。
1940		ポーランド、アウシュヴィッツにナチスが強制収容所を設置する。
1941	戦時中は結婚、出産、信州への疎開、離婚、再婚などを経る。	真珠湾攻撃により太平洋戦争が勃発する。
1945		広島、長崎に原爆投下、日本は無条件降伏する。満洲国解体、残留日本人抑留、引揚が始まる。
1947	自由美術家協会会員となる。(～1975)	朝鮮戦争が始まる。
1949		中華人民共和国が成立する。
1951		サンフランシスコ平和条約および日米安全保障条約を締結される。

1953	児童画の仕事の側ら、画家の社会参加として 鉱山、炭鉱をテーマとする油彩、版画等の制作を始める。 1950年代は銀座・資生堂画廊をはじめ各地で個展を開催する。	朝鮮戦争、休戦状態に入る。
1959		三井三池争議が起こる。(～1960) その敗北により鉱山労働運動の沈静、散逸が進む。キューバ革命政権が成立する。
1960		日米安全保障条約改定に反対する60年安保闘争始まる。
1961	ラテンアメリカに1年間取材旅。インド洋、喜望峰経由でブラジル、チリ、メキシコ、キューバなど各国を訪れる。	ベルリンの壁が建設される。
1962		キューバ危機が勃発する。
1964		米国にて公民権法が制定される。
1965		米軍がベトナム北爆を開始する。
1966		中国で文化大革命が始まる。
1967	インド、西アジア、中央アジアを旅行し、画家としてのアイデンティティについて考える。	
1968		チェコスロバキアで民主化運動「プラハの春」が起こる。パリで五月革命が起こる。
1970	韓国ソウルを訪れ、旧満洲ハルビン女学校の学友たちと再会する。	
1971	再びソウル刑務所で徐勝と面会し、政治犯として投獄された詩人金芝河(キム・ジハ)をテーマとして制作を始める。	
1972	個展「金芝河の詩によせて」を銀座の画廊で開催する。	米国より沖縄が返還される。
1973	版画作品集『パブロ・ネルーダの詩によせて』を制作する。	チリで軍事クーデターが起き、ピノチェト政権が発足し、詩人パブロ・ネルーダや歌手ビクトル・ハラらが虐殺される。タイで「血の水曜日事件」が起こり、学生らによる民主化運動と政府が衝突し、その学生勝利をもとに「カラウン楽団」の活動が始まる。韓国の民主化運動家であった金大中が東京で拉致され強制帰国させられる。
1974	金芝河をテーマとした版画作品集『しばられた手の祈り』を制作する。	韓国にて民生学連事件が起こる。180人が軍法会議にかけられた中に詩人金芝河も含まれる。
1975	版画展「金芝河とパブロ・ネルーダの詩によせて」がニューヨーク、シカゴ、パークレーを巡回する。金芝河をテーマとした『深夜—金芝河・富山妙子詩画集』(土曜美術社)を出版する。	ベトナム戦争が終結する。

1976	日本のテレビ局による金芝河をテーマとした富山のテレビ番組が放送中止される。版画展「金芝河とパブロ・ネルダの詩によせて」がニューヨーク、シカゴ、パークレーを巡回する。金芝河をテーマとした『深夜—金芝河・富山妙子詩画集』（土曜美術社）を出版。 自主制作のための火種工房を主宰し、新しい芸術運動として詩と絵と音楽によるスライド作品を制作し、その後の全スライド作品を含め音楽を高橋悠治が担当する。	
1977	初のスライド作品『しばられた手の折り』が完成する。松井やよりらと共に「アジアの女たちの会」を発足する。	
1979	『解放の美学—20世紀の画家は何を目ざしたか』（未来社）が出版される。	ソビエト連邦によるアフガニスタン軍事介入が始まる。
1980	韓国、光州事件後すぐに『倒れた者への祈祷 1980年5月光州』の版画シリーズとそれを基にしたスライド作品を制作し、以後、関西、札幌にて巡回展を開催する。	韓国で金大中への死刑判決を機に、光州事件が起き、学生や市民による民主化要求のデモを軍部が武力鎮圧、虐殺する。イラン・イラク戦争が始まる。(～1988)
1981	『わたしのギリシャ神話 エロスへの回帰』（童心社）が出版される。	
1982	パリ、ベルリン、ハイデルベルグ、ミュンヘンにて巡回展開催。(～1983) 朝鮮人強制連行・福岡刑務所で獄死した尹東柱（ユン・ドンジュ）の詩による版画とコラージュによるシリーズ『引き裂かれた者たち』を制作する。(～1984)	
1983	『はじけ！鳳仙花：美と生への問い』（筑摩書房）が出版される。	
1984	土本典昭監督による映画『はじけ鳳仙花』が完成する。パリ、ベルリンで映画上映される（1986年にメルボルン映画祭招待出品）。	
1985	第11回FROM展にて「特別陳列 富山妙子」（第1回中村正義賞受賞記念）が開催される。 ※第6回展～第18回まで参加する。 スライド作品『蜚語』を制作、ミュンヘンドキュメンタリー映画祭にて受賞する。 『ソウル—パリ—東京』（影書房、李應魯、朴仁景との共著）が出版される。	
1986	従軍慰安婦をテーマにしたシリーズ『海の記憶』を制作する。	チェルノブイリ原子力発電所事故が発生する。
1987	『海の記憶』を基にして築地本願寺境内で佐藤信演出、劇団黒テント公演『海鳴り花寄せ』が開催される。(後ドキュメンタリー映画化)	
1988	ロンドン、ベルリンにて巡回展開催。スライド作品『海の記憶』を制作する。	

1989	第15回作品展にて「特別陳列 富山妙子と黒テント（海鳴り花寄せ）」が開催される。「戦争開始50周年記念—富山妙子展」が巡回する。（5月 ベルリン、8月 リバティ・おおさか）『戦争責任を訴えるひとり旅—ロンドン・ベルリン・ニューヨーク』（岩波ブックレット）が出版される。	昭和天皇が逝去する。 中国北京で天安門事件が起こる。ベルリンの壁が民主化運動の影響から崩壊する。（翌年東西ドイツ統一）「連帯」の民主化主導により非共産主義政府のポーランド共和国が成立する。呼応するように、チェコ、スロバキア、ハンガリーなどで民主化、ルーマニアで流血革命などが続発する。
1991	タイの出稼ぎ女性をテーマとしたシリーズ『帰らぬ少女』（ジャラッシイ・ループカムディとの共作）を制作する。バンコクにて二人展を開催する。	湾岸戦争が勃発する。ソビエト連邦が崩壊する。ユーゴスラビア内戦勃発、各国の分離独立と紛争が頻発する。（～2000）
1992	『帰らぬ女たち 従軍慰安婦と日本文化』（岩波ブックレット）が出版される。多摩市フェミニストフェスティバルにて「エロース・わが痛み—富山妙子展」が開催される。スライド作品『帰らぬ少女 Let's Go to Japan』を制作する。	前年に勃発したアフリカ東部ソマリア内戦に対して国連多国籍軍が派遣されるも、混迷と被害増大で撤退を余儀なくされる。
1993	国際交流基金アセアン文化センターにてジャラッシイ・ループカムディとの二人展「アジアへの視座—帰らぬ少女原画展」が開催される。	
1994	旧満洲ハルビンを約50年ぶりに訪問する。カラージュシリーズ『ハルビン駅・夜と昼の時刻表』、版画シリーズ『からゆき』『黒い河』『天と地』『ユーラシアの空の下』、油彩作品シリーズ『20世紀へのレクイエム』などのシリーズを制作する。『美術史を解き放つ』（時事通信社、萩原弘子、浜田和子との共著）が出版される。	1990年より内戦が起こっていたアフリカ中部ルワンダにおいて、100万人が100日間で犠牲となる大虐殺が勃発する。 南アフリカ共和国で黒人のマンデラ大統領が誕生し、民主化が達成される。
1995	『Silenced by History Tomiyama Taeko's Work』（現代企画室）が出版される。多摩美術大学附属美術館（現、多摩美術大学美術館、4月）とソウル東亜ギャラリー（8月）にて「戦争50周年記念 富山妙子・20世紀へのレクイエム」展を開催する。スライド作品『ハルビン：20世紀へのレクイエム』を制作する。第一回光州ビエンナーレ「光州5月精神展」に招待出品する。	阪神・淡路大震災が発生する。オウム真理教による地下鉄サリン事件が起こる。
1997	リバティ・おおさかにて「慰安婦へのレクイエム 富山妙子作品展」が開催される。	
1998	洪成潭（ホン・ソンダム）との二人展『From the Asians』が巡回展として開催される。（5月 光州市望月洞ギャラリー、11月 富川市庁舎ロビー、12月 川崎市教育会館）	
2000	第3回光州ビエンナーレ国際展「芸術と人権」で招待展示、インスタレーション『倒れた者への祈祷』と『きつね物語』シリーズを出品する。世田谷区生活文化工房にて「きつねと炭鉱展」（絵・写真・詩・音楽のコラボレーション）を開催する。『ギリシア神話』（のら書店、石井桃子：編・訳）が出版される。	「慰安婦」問題をめぐる女性国際戦犯法廷を東京で開催される。

2001	10月6日、火種工房25周年記念『海の道・傀儡子物語』企画発表パーティを代官山ヒルサイドテラスにて開催する。アクロス福岡に「きつねと炭鉱展」が巡回する。 東京ウィメンズプラザにて「わたしが語るフェミニズム」で講演とスライド作品を上映する。成蹊大学トラスコンガーデンにて「富山妙子展—Let's Go To Japan—」が開催される。	アメリカ同時多発テロ事件、アフガニスタン紛争が始まる。
2002	京都精華大学ギャラリーフロールで「巫女ときつね」展が開催される。スライド作品『きつね物語 桜と菊の幻影に』が完成する。 光州シリーズの作品80点が光州市立美術館に河正雄コレクションの一部として収蔵される。 永年の盟友である松井やよりがアフガニスタン取材からの帰国後、肝癌を発症し急死する。	
2003		イラク戦争勃発、米軍を中心とした国連多国籍軍による侵攻が行われる。
2004	『けろけろころろ』(福音館書店、高橋悠治：文、音楽)が出版される。 ドイツのポッフムのルール大学、米国のフィラデルフィアのYMCAおよびテンプル大学、エヴァンストンのノースウェスタン大学にてコラージュ作品展「富山妙子・記憶と和解」が開催される。(～2005)	
2005	6月にソウルk梨花女子大学での世界女性学大会に招待をされ、スライド作品上演と講演を行う。東京新大久保の高麗博物館にて「富山妙子版画展 光州25周年」が開催される。 日本教育会館一ツ橋画廊にて「富山妙子展 20世紀へのレクイエム—記憶のコラージュが」開催される。第3回千野香織記念賞を受賞し、12月2日「記念講演 20世紀へのレクイエム—絵と音楽が出会って時代を語る—」とスライド作品上映が開催される。	
2006	『20世紀へのレクイエム：絵と音楽が出会って時代の声をつげる』(中世日本研究所)が発行される。	
2009	「アジアを抱いて—富山妙子の全仕事展 1950～2009」が越後妻有アートトリエンナーレにて開催される。DVDによるスライド作品『蛭子と傀儡子 旅芸人の物語』を制作する。 『アジアを抱く、画家人生 記憶と夢』(岩波書店)、『蛭子と傀儡子 旅芸人の物語』(現代企画室)が出版される。 目黒区美術館での「文化資源としての〈炭鉱〉展」に初期油彩作品を出品する。	バラク・オバマが黒人初のアメリカ合衆国大統領となる。
2010	東京YWCAにて「植民地と富山妙子の画家人生」展が開催される。 『Imagination Without Borders』(ミシガン大学日本学科)が出版される。	

2011	『海からの黙示』シリーズの制作を始める。 VAWW RAC 主催による、「わたちの記憶への旅」プロジェクト公開インタビューが5回にわたり実施される。(～2012)	東日本大震災、福島第一原子力発電所事故が発生する。
2012	3月2日、女性就業支援センターのシンポジウムにて「3.11 富山妙子の絵によるメッセージ」展が開催される。3月3日、東京大学生産技術研究所での国際シンポジウム「コリアン・ディアスポラの記憶を手繰るー『犠牲の状況』を超えてー」に参加、作品展示もする。慶應義塾大学・来往舎ギャラリーにて「富山妙子作品展ー記憶の糸を紡ぐ 震災・戦争・女」が開催される。平塚市・八幡山の洋館にて「富山妙子のメッセージ展～3.11を見つめて～」が開催される。	
2013	東京アートミュージアムにて「富山妙子 現代への黙示ー9.11と3.11ー」展が開催される。 『〈男文化〉よ、さらばー植民地、戦争、原発を語る』(岩波ブックレット、辛淑玉との共著)が出版される。 9月27日、在日韓国YMCAにて「『〈男文化〉よ、さらば』辛淑玉・富山妙子の会」が開催される。	
2014	DVDによるスライド作品『海からの黙示』を制作、完成する。 10月4日、宮崎公立大学にて「アーティスト富山妙子が語るー私の戦中・戦後、そして福島」で講演とスライド上映を行う。	
2015	ベルリンのnGbKでの「禁止されたイメージ」展に招待展示される。	
2016	原爆の図丸木美術館にて「特別展示 富山妙子 終わりの始まり、始まりの終わり」が開催される。	
2017	ソウルの国立女性史展示館での「真実ー平和への約束」展に招待展示される。	
2019	神奈川県相模原市の藤野倶楽部にて「特別展示 富山妙子 終わりの始まり、始まりの終わり II」が開催される。	
2020	ソウルの国立現代美術館での朝鮮戦争70周年記念「見知らぬ戦争」展に出品する。	新型コロナウイルスが世界各地で感染大流行する。
2021	ソウル延世大学博物館にて「記憶の海へー富山妙子の世界」展を開催。	